

当コラムの新テーマ「食と歯の健康で、病気知らず！」

第5回目は、ここまで当コラムで紹介してきた「噛み合わせ」など病気や症状のお話から少し離れ、いわゆる「歯科治療」の最前線（最先端分野）のお話をしたい。

現代の、そして今後の歯科治療は、こんな風にならなくていくというもので、ビジネス誌である本誌読者にとっても、気軽に読んでいただけたらと思う。

近年歯科業界にも急速にデジタル化が進行している。
歯科補綴物（詰め物、入れ歯など）作成に関しては、歯型を採った石膏模型上で歯科技工士さんが手作業で作成していた。だが、近年はそれをCADでスキャンしてCAMで作成するようになってきている。

十 未病の憂い

歯科医が語る現代版養生訓

歯科技工士さんもWAXと火を使う仕事から、マウスを動かし歯科修復物を作成する仕事に変わりつつあるのだ。

さらにデジタル技術の拡大に伴って歯科材料も多様化し、常に学習しなくてはいけず最新の医療を提供できなくなってきた。

従来、歯型を採る（印象採得という）には海藻を利用した印象材と、シリコンを利用した印象材が多く利用されている。この分野でも、デジタル化の波は著しく、また普及は一

食と歯の健康で、病気知らず！⑤ 歯科で進むデジタル化

一般的にはなっていないが、歯型も光学写真（印象）でデータとして記録し、それにより歯科補綴物の作成が試みられてきている。

ドロツとした印象材を使用しなくても良いことになると歯型を採ることが苦手の方には朗報だ。

この技術の発達は、歯科医療においては、主にインプラント治療の支台や上部構造に応用するため、発展を遂げてきたものだ。

最近では、3Dプリンタも少しずつ歯科医療の分野に応用されてきている。矯正の分野だ。

歯列矯正用のソフトの開発が進み、デジタル画面で、患者さんの歯忠実に再現、精密に再現された患者さんの歯をバーチャルで移動させる、最終的にどのような歯列が獲得できるか予想して治療することが出来るようになってきている。

その治療の過程をデータで取得し、3Dプリンタで樹脂模型を作製しマウスピース型の矯正装置を作る。

このように現在デジタル・マウスピース矯正の分野に応用されてきており、この治

療法は歯に金属を付けない、目立たない、痛くない矯正法として注目を集めている。

皆さんが想像される、既存の歯列矯正は、歯にワイヤーを付ける大がかりなものだろう。デジタル歯列矯正が、今後主流になっていけば、より多くの皆さんが、ストレスなく、歯列矯正を受けていただけるのではないかと、そんな思いを歯科医としては期待している。

また、一般的に歯列矯正はブラケットという小さな装置を歯に直接ボンドしてワイヤーで移動させるが、デジタルブラケット矯正は、その装置をボンドする際に前もって計画的に正確な位置が決めることが出来るというメリットがある。一般の矯正では、このブラケットという小さな装置の装着位置が大きく治療に左右する。

医療の世界にもデジタル化の波はさらに押し寄せており、治療のあり方も改良されていくだろう。

顎関節症 ドライマウス 舌痛症

長栄歯科クリニック
亀井 英志
Kamei Hideshi

ストレスは
見える！
すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも歯を食いしばっている、…。心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては「噛みしめ」が原因だった』をお読みいただきたい。未病、の原因をまとめた良書です。

亀井英志（かめいひでし）

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒業。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

